

日系アメリカ文学——強制収容所内の文学活動④

ヒラリヴァー収容所——

篠田 左多江

(平成5年9月30日受理)

Japanese American Literature: the Literary Movement in the Gila River Relocation Center

Sataye SHINODA

(Received September 30, 1993)

はじめに

第2次大戦中、アメリカ合衆国太平洋沿岸に設定された軍事地域に住む約12万の日系アメリカ人が、全米10カ所の強制収容所へ送られた。それから40年あまりを経た1988年、レーガン大統領は、強制収容されたすべての人びとに謝罪し、補償金を支払うことを決めた日系人補償法案に署名した。法案は成立し、1990年10月からひとり2万ドルの補償金の支払が開始された。合衆国は、当時の政策が誤りであったことを正式に認めたのである。さらに政府は、日系人史の教育を奨励し、スミソニアン博物館をはじめ、日系人と関係の深い地域の博物館に日系人史コーナーを設けて、人びとの啓蒙をめざした。これにともない、日系人側でも史料の収集・保存の重要性を自覚し、コミュニティの資料室や博物館の設立に努力するようになった。

1992年、ロサンゼルスに全米初の日系人博物館 Japanese American National Museum が設立された。リトルトウキョウの本願寺の建物に造られたこの博物館には、初期移民時代の農具や衣服をはじめとしてありとあらゆる史料が集められている。それらはテーマにしたがって整理され、逐次展示されている。強制収容所の個人の記録もコンピュータで検索できるなど、展示方法も工夫されている。リトルトウキョウはかつて全米でもっとも大きな日本人町で、近郊に住む日系人の憩う町であった。現在でもこの町を心のより所として暮している日系人も多いことから、ここは全米日系人の中心地に相応しい。リトルトウキョウには、日系文化センターのなかにフランクリン・マーフィー図書館があって、ここ

教職教養科 英語第1研究室

にも古い日系移民史関係の書籍が集められている。さらにリトルトウキョウにわずかに残る戦前からの古い町並みの保存も決まっている。

このような政府側の対応と日系人自身の努力により、合衆国社会の日系人強制収容への見方は変化している。かつて一般のアメリカ人は強制収容の事実を知らず、日系三世でさえ祖父母や両親の収容の事実を知らない時期があった。しかし今日では、歴史教育の結果、強制収容は若者にもよく知られるようになった。カリフォルニア州マンザナ収容所が、1991年に連邦政府により永久保存の重要史跡に指定されて以来、これまで顧みられることがなかった収容所跡も、全米日系市民協会の努力と州やカウンティの人びとの協力で整備されつつある。

筆者は10カ所の収容所の文学活動を明らかにすべく調査を行ってきたが、ポストン収容所^①、トゥーリレイク隔離収容所^②、ハートマウンテン収容所^③に続き、本稿ではヒラリヴァー収容所について述べる。

1. ヒラリヴァー収容所の生活

ヒラリヴァー収容所、正式にはヒラリヴァー転住所 (Gila River Relocation Center) は、アリゾナ州のピマインディアン居留地 (Pima Indian Reservation) のなかにあった。原住アメリカ人はここで、小麦、とうもろこし、かぼちゃ、瓜などを作って、細ぼそと農業を営んでいた。この地名は、第1次世界大戦のとき1916年に戦死したピマ族の兵士の名に因んだものである。インディアン居留地は一般に人里離れた荒野にあるが、ここもフォートニクス市まで北へ40マイルの遠隔地であった。収容所は第1と第2のふたつの区域に分れていた。第1、第2では味気ないというので、第1は運河のそばにあっ

たため Canal, 第2は西側に溶岩丘があったことから Butte と呼ばれるようになった。のちに日本語で Canal を「川の市」, Butte を「山の市」と呼んだ。これは殺風景な収容所を少しでも潤いのある所にしようという収容者の努力の表われである。「川の市」は209.50エーカー、「山の市」は789.25エーカーで、両収容所の間は4マイルの距離があった。徒歩で約1時間を要するため、1943年になると往來を円滑にすべく、午前7時45分から30分おきにシャトルバスが運行するようになった。

最初の入所者は、1942年7月20日、トゥーレアリ仮収容所 (Tulare Assembly Center) からの任意入居者520名であった。その後、おもにトゥーレアリ、ターロック (Turlock), サンタニータ仮収容所 (Santa Anita) から人びとが送られ、移動は同年10月までに完了した。12月の調査によれば、住民は男子8,195名、女子5,123名で圧倒的に男子が多く、男女比が著しくアンバランスであった⁴⁾。このなかで帰米二世は約1,000名であったという。家屋やブロック構成は他の収容所と同じである。異なるのは、バラックの屋根が赤いタイルだったことである。トゥーレアリ収容所は黒いタールペーパーの壁に黒い屋根であったため、陰鬱な印象であったが、ヒラは明るい雰囲気であったという。海拔は1,500フィート、気温は冬が華氏20度から60度、夏が華氏80度から117度と温度差が大きいが、夏が長く暑いわりに冬は短かく、寒さもそれほどひどくなかった。降雨量は年間わずか10インチで、完全な砂漠地帯である。そのため灌漑水路の整備の遅れなどの理由から、人びとは慢性的な水不足に悩まされたようである。

収容所に落ち着くとまず、人びとが努力したのはいかに住み良い場所にするかということであった。日本人は身のまわりに花や緑がないと精神的に落ち着かない人種であるようだ。この地は不毛の砂漠地帯で、巨大なサボテン以外ほとんど木らしいものはなかった。そのため収容者はコットンウッド⁵⁾を植えて、緑を増やそうと努力した。42年10月には60名のボランティアが35本のコットンウッドを植えた。この木は4メートルの高さになり、夏には人びとが憩う緑陰を作った。のちには庭園部が設立され、柑橘類を中心に150本の苗木を植えて並木とした。しかし、これらが実ったという記録はない。43年には川の市に榆の木200本が植えられた。さらにリヴァーズ種苗園ができて、花が栽培された。43年1月にはスイートピー、カーネーション、菊などが咲き、この月の末に

は生花店が開店した。人びとの日常生活を飾るほど多量の花はなかったと思われるが、冠婚葬祭やパーティーに使う花は予約をすれば手に入れることができた。



ヒラリヴァー収容所, 1943年 (加屋良晴氏提供)

WRA (戦時転住局) は日系人の多くが優秀な農業専門家であることを考慮して、収容者の食料の自給自足を計画した。10ヶ所の収容所のうち、土壌が農業に適さなかったのはマンザナだけで、その他はすべて開墾され、不毛の地が驚くほど豊かな農地になった。ヒラでも溶岩丘の東に2,000エーカーの農場が完成した。灌漑用水の確保によって、ここは肥沃な農場と化したのである。ヒラでは最初、トゥーレアリから農産物の供給を受けていたが、のちには自給できるようになった。野菜を作る農場は、チャプスイファーム (Chop Suey Farm) と呼ばれて22種の野菜が植えられていた。中心となった人は、ハンフォード (Hanford, Ca.) 出身のミン・オマタで、収容者に日本の野菜を食べさせたいと、私費300ドルを投じて大根の種を取り寄せて蒔いた。これが収穫されたとき、盛大な「大根祭」が行なわれ、以後この収容所のおもな年中行事となった。

所内にはカモフラージュネットの工場があり、住民に戦争努力への貢献を求め、市民権を持つ人のみが働くことを許された。また、早くも42年9月から WRA の斡旋で、綿花摘みの労働者が求められた。アリゾナ州は全米の4分の3の量の長い繊維の綿花を産出し、それは戦時国防必需品であった。戦時中の労働者不足のため、収穫には収容者の労働力がぜひとも必要であった。戦争努力に貢献すると同時に賃金も得られるとあって、多くの男女が応募し、1度に約100名づつ外部へ就労していった。賃金は長繊維綿を100ポンド収穫すれば3ドル、短繊維綿が100ポンドで1ドル50セントであった。

1943年2月に忠誠登録が行なわれたが、ヒラでは目だたぬ混乱はなかった。登録拒否を強要した者が当局から注意を受けたくらいであった。3月はじめまでに17歳から38歳の男女で登録した者は5,200名であった。ヒラで問題とされたのは政治的なことではなく、もっぱら賭博や青少年の不良化といった社会問題であった。いずれの収容所でも程度の差こそあれこのような問題は存在したが、トゥーリレイクやマンザナのように合衆国に忠誠な者、不忠誠な者との間の深刻な政治的対立がなかったために、ここでは社会問題がクローズアップされたのであろう。42年秋から山の市で賭博によって24名の検挙者を出す騒動が起こっている。当局は、職業的に賭博場を開く者があり、善良な人びとを誘惑して金銭を巻き上げているとして厳重に取り締まった。賭博をした者は、発覚すると逮捕されて、髪を丸刈りにされてしまったという。戦前の日系人社会と賭博は切り離せないものであり、在米日本人会やキリスト教団体は早い時期から賭博撲滅運動を行っていた。悪辣な博徒の名前を移民地の新聞紙上に公表するだけでなく、日本へも知らせるといふ強硬手段をとって撲滅にのりだしたが、移民地は娯楽の少ない男性社会という事情もあり、賭博で身をあやまる人はあとを絶たなかった。収容所内での賭博はこのような風潮が収容所にまで持ち込まれたことを裏付けている。

1943年3月にはヒラから101名が志願兵となったが、その一方でパチューコ (pachuco) と呼ばれる不良青年も増えていった。彼らは収容所生活に希望を見出すことができず、群をなして所内をのし歩き、けんかをしかけたり、恐喝をはたらいたりした。とくにこの時期には揃いの赤い帽子に赤い靴といういでたちで、鳥の羽根のような独特の髪型をして一目でそれと判別できた。これに対して親たちは、財産を失った日系人の唯一の希望は後継者の育成であるのに、その大切な子供たちに悪影響を及ぼす不良青年たちは許せないとして、ブロックごとに自警団を作って、子供の不良化防止に努力した。収容所では3度の食事を作る必要もなく、希望しなければ就労の必要もなかったため、生活の基本が崩れて両親が子供を放任する結果となった。子供がある程度の年齢になると、食堂では友人同士で食事をし、母親は同年齢の人同士、父親も仲間と食事をともにするという家族がばらばらの状態が、いたる所で見られた。家庭の団欒が失われ、次第に家族関係が崩壊していく。子供を育てるには最悪の環境であった。親たちは毎晩9時以降は子供を外

に出さないなどの申し合せをして、ブロックごとに子供たちの動向を見張った。このような対処法は、日本人独特の「町内会」的な発想であった。

忠誠登録を境に所内の人びとは忠誠組、不忠誠組に二分され、不忠誠者はトゥーリレイクへ隔離された。これとは逆に軍隊に志願したり、徴兵された者は徐々に入隊のために移動して行った。忠誠を表明すれば外部へ出ることができた。トゥーリレイクへ送られる人びとは1,818名で、43年10月1, 2, 3, 6日の4回に分けて出発した。これらの人びとが去ってしまうと、ヒラには合衆国に忠誠な人びとばかりが残った。1944年6月にはジェローム収容所 (Jerome, Ark.) の閉鎖にともなって、2,300名が移動して来た。ヒラでは、とくに騒動も起こらず、平穏な明け暮れであった。人びとの関心は、再定住の場所とよい仕事を探すことに向けられた。1945年8月、日本が降伏したのち、この月の終わりまでに収容所は閉鎖された。

2. 比良男女青年会の活動

収容所への移動が完了してほどなく、若い婦米二世が集って婦米男女青年会が発足した。急激な環境の変化によって落ち着けなかった若者たちも、収容所生活を少しでも楽しいものに変えようと考え始めた。そして親睦会という形で始まったのがこの会であった。これは山の市で結成され、1942年11月1日、比良男女青年会と改名して発会式が行なわれた。これには65歳以上の人びとが招待され、敬老会も兼ねた催しとなった。会員は婦米二世で、程度の差はあったが、日本で教育を受けていたため、日常生活ではおもに日本語で話していた。収容所では英語が公用語であったため、英語の分からない一世は不自由な思いをしていた。婦米二世にも英語が得意な者が多く、この点では一世と同じ悩みをもっていた。彼らは、日本語を媒介として一世と意志の疎通をはかって役に立ちたいという気持ちから、敬老会と発会式を結合させたと思われる。一方、老人を尊敬するという儒教思想、すなわち日本古来の美德を尊重することを示したものであろう。出演者は100名あまりでかなり大規模なものであった。日系社会の指導的立場にいた一世は、真珠湾攻撃の直後に逮捕されて抑留所に送られ、一世社会では指導者不在になっていた。収容所にはいった一世は、監理当局に協力する純二世に主導権を握られ、取り残された思いであったにちがいない。婦米二世はその心情を理解して、

手を差しのべたのである。会員たちは、一世から感謝と賞賛をもって受け入れられた。青年会は一世を賛助会員として組織に迎えた。会は親睦と娯楽だけでなく、精神修養もすべきであるという意見もあり、一世の開教使・越智道順を顧問に迎え、日曜日ごとに仏教講話の勉強会を開くようになった。

また、会員だけでなく、収容所の社会にも貢献する意味で、結成の1ヵ月後に手工芸展覧会を開いた。とくに老一世たちは、仕事に就くこともなく、暇を持て余していた。彼らの間で流行したのが、工芸であった。根気強く探せば、砂漠でも美しい石や変った形の木の根を見つけることができた。巨大なサボテンやメスキートトゥリーも工夫次第で、花立てやパイプの材料になった⁸⁾。老人たちは、丹念にそれらを磨いたり、削ったりして、驚くべき熱心さで美しい工芸品を作り上げたのである。女性たちは、紙きれを集めて彩色し、日本人形を作った。1942年の暮れ、手工芸展への出品は2,200点にも及んだ。



手工芸展の日本人形を見るWRA職員，1942年12月
(加屋良晴氏提供)

いくつかの食堂を会場として開かれたこの会は展示即売会も兼ねて、作品の販売もおこなった。日本人形は人気があって、たいへんよく売れたという。殺風景な収容所の部屋に飾って、少しでも彩りのある生活をしたいという気持が人びとに人形を買わせたとであろう。あまりの人気に3日の会期を2日間延長しなければならなかった。入場者は延べ15,000人で、大成功であった。この手工芸展が開かれていたころ、マンザナ収容所では暴動事件⁹⁾

が発生しているが、ヒラではきわめておだやかに月日が過ぎていった。

青年会のもうひとつの活動は、日本語図書館の開設であった。これは会の結成とほぼ同時にスタートした。会員は人びとに呼びかけ、約300冊の日本語の本を集めた。ひとつの部屋を確保して図書室とし、朝9時から夜の9時まで開いた。貸出し業務が中心で1日に平均41冊を貸出した。翌年には蔵書は1,329冊に増え、1日平均90冊を貸出すまでになった。戦争中であるから、雑誌はもちろん新しい日本語の本は輸入されなくなっていた。さらに強制立ち退きの際に日本語の書籍を所持していると逮捕につながるとして、処分した人も多かったため、一世や婦米二世は日本語の本に飢えていた。WRAの運営する図書館の蔵書は英語の書籍のみであった。したがって日本語図書館の運営はこのような人びとの要求を満たすものであった。青年会は社会的活動の一環として、年末に餅つきをしたり、マラソン大会や運動会といったスポーツの行事も行なった。

1943年8月、比良男女青年会に正式に登録した会員は359名を数える。彼らの大多数は、不忠誠組となってトゥーリレイク隔離収容所へ送られることになった。会員はトゥーリレイクで活動を再開することを誓いあって、最後に会員名簿を発行して解散した。

3. 比良男女青年会機関誌『若人』

比良男女青年会の活動も、1943年2月に忠誠登録が実施されると、困難な時期を迎える。会員の大多数は合衆国への忠誠を拒否し、隔離収容所への移動または日本への送還を希望した。したがってWRA当局は青年会を危険分子の集団と見なし、10名の役員を逮捕してモアブ抑留所(Moab Citizen Isolation Camp, Utah)へ送った⁸⁾。指導者を失った青年会が、体制を建て直すには約2ヵ月を要したが⁹⁾、丸山郁夫¹⁰⁾が会長となって4月から再び活動を開始した。発足当時からの懸案であった機関誌の発行は大幅に遅れ、4月15日、ようやく『若人』第1号が発行された。

『若人』創刊号の表紙には自由の女神像が描かれている。民主主義を標榜するアメリカ合衆国で、市民権を有しているにもかかわらず、当時もっとも非民主主義的な扱いを受けていた青年たちの創る機関誌が、自由の女神像を掲げたのは、皮肉な思いをこめたからであろう。自由の女神に象徴される合衆国はどこへ行ったのか。彼ら

は市民として、心からそう叫んでいたにちがいない。しかし青年たちが目指したのは、声高く合衆国を非難したり、暴力を用いてWRAに反抗したりすることではなかった。あくまでも穏やかに、収容所を精神修養の場と変えることで、この時期に自らを磨こうというのである。彼らの精神的指導者の役割を果たした一世のひとりに木村義文がいる。彼は創刊号に「収容所か修養所か」という1文を載せた。木村は「心現在を要す事未だ来らざるに心遊ぶべからず事既に往けば心追ふべからず」という佐藤一齊⁹⁰のことばを引用して、過去を振り返って愚痴を言ったり、あてにならない未来を想像して取り越し苦労をするなど愚かなことであると述べている。そして将来をあれこれと思わずらうのではなく、現在を大切に収容所を精神修養の場にしようと呼びかけている。木村の主張は、青年会の基本的姿勢を示すもので、会の指針となっていた。

創刊号の内容は、越智道順の人生訓「毒語寸経」に始まり、収容所での感想、短編小説、詩、短歌、俳句など雑多である。伊藤正⁹¹の「感じたまま」、平野凡人の「所内結婚可否論」などは当時の若者が直面していた問題を論じたもので興味深い。伊藤は、財布を拾って届けた正直な日系女性が誉められて、「アメリカ人として当然のことをしたまで」と答えたことが新聞紙上で紹介された件を取り上げ、彼女に「人間として当然のこと」と言ってほしかったと述べている。アメリカ人であるのに日本人の血をもっているという理由で鉄柵のなかに囚われている作者は、アメリカ人か日本人かを選択するのではなく、人種にこだわらず人間として生きるのだと自分自身にも言い聞かせているように思われる。

第2号は6月20日に発行された。15日に発行の予定であったが、直前になってWRAは、『若人』を発行禁止処分にした。担当者が内容の詳細な翻訳を提出して十分に説明したのち、19日に許可がおりたが、発行は遅れてしまった。その上、検閲を通らず掲載できなかった作品もあったという。内容は前号よりさらに充実している。創刊号に掲載された木村義文の主張は、ここでも加久多須というペンネームの「現在を有意義に生きよ」と題した文のなかで次のように繰り返されている。「所内は社会の縮図である。求めやうとする志があればそこには道は色々開けてくる。このキャンプ生活は天から与えられた修養の時代だ…戦後の活躍に対する細心の準備を怠ってはならない」⁹²このようないましめが繰り返されてい

る背景には、人びとがいかにデマに惑わされ、疑心暗鬼で右往左往していたかがうかがえる。この号には、野口蒼平の「母の日に」、戸嶋綾子の「慰問の記」、スミ子の「珍客」など、収容所内のできごとを描写した若い人の随筆が掲載されている。収容所の食堂で働いている主婦は、母の日には休みになって、代わりに若い娘たちが働くことになっていたらしいが、「母の日に」はその日には14年前に別れた日本の母への想いを綴ったものである。「慰問の記」は、青年会の女性会員が所内の病院へ図書館の本を届けて、患者を慰める様子を書いている。社会の役に立ちたいという若い女性のひたむきな気持がよく表われて、このような人びとが青年会を支えていたのだと分かる。「珍客」はアメリカに出稼ぎに行ったまま行方不明になっていた日本の女学校時代の親友の兄に、偶然収容所のなかで会うというできごとを、作者の日本時代の思い出とともに綴った作品である。探し求めていた兄がこの収容所にいることを、なんとかして日本の親友に伝えたい。しかしそれを妨げている戦争という現実と作者のもどかしさが素直なことばで書かれている。

『若人』第3号は8月30日に発行された。編集部によれば、WRAはすべての作品を翻訳し、英文と和文の両方を掲載すべきであると主張したという。しかし、双方の折衝の結果、従来通りの形式で許可された。青年会の会員は大部分がトゥーレイクへ隔離されることになっていたため、WRAはその動向に必要以上に神経をとがらせていたと思われる。会員の移動にもなって比良男女青年会は解散、『若人』もこの号をもって終刊となった。この年の夏はとくに猛暑で、温度計が破裂して水銀が飛び散るほどであったが、編集者は最後を飾る立派な雑誌を発行しようと暑さのなかで奮闘したという。これまでは毎号とも40ページ弱であったが、第3号は80ページになった。このなかで野口蒼平は「沙漠に咲く花」を書いている。彼は43年5月に失踪した一世老人の捜索隊に加わる。5月の砂漠には、さまざまな花が咲いており、それらをひとつずつ丹念に観察して行く。ごくありふれたセイジブラッシュの花は黄色く可憐、メスキートトゥリーの花はアカシアに似ているとか、花を愛する気持が読者に伝わる。普通なら目をとめることもない雑草の花も、収容所という特殊な環境にいるからこそ、その美しさが見えてくるのであろう。多くの人びとが捜索したにもかかわらず、老人を発見できなかった。作者は実は、老人が見つからないことを願っているのである。そして

モンタナへ去った息子の後を追った老人が貨物列車にひらりと飛び乗って、愛する息子のもとへ着いてくればよいと思ったりする。その姿はいつしか作者の今は亡き父の姿と重なる。作者は16年前、日本の父に親不幸の限りを尽くして別れ、渡米したのであった。そして30歳を過ぎた今、地の果てまでも父を訪ねて行きたいという思いにかられる。前号の「母の日に」では母への、「沙漠に咲く花」は父への想いを綴った佳作である。

3冊の『若人』を通じて力作を載せているのは、伊藤正である。すでに述べたように第1号で、彼は人種にかかわらず人間として誠実に生きることの大切さを訴えている。このほか彼は、短編「父のことば」のなかで、帰米二世と純二世の兄弟が忠誠登録に際し、不忠誠と忠誠に分れ、弟は志願兵となる父子関係を描いている。父は兄弟に対し、自らの信ずるところに従って人間として誠実に生きよと説く。第3号では「転住所風景」と題して戯曲の形式で、日ごろから作者の気にかかっていた収容所内の現実を描き、問題を提起している。彼は所内で人びとの心がすすんでいくのを見て、書かずにはいられなかったと述べている。登場人物は第1部が老人と若い男のふたり、第2部はこのふたりに1組の母子と数人の男が加わる。老人は、「愛国行進曲」のレコードをかけて故国を偲んでいたところ、当局に密告されて、レコードを没収されたと嘆く。老人にとって「愛国行進曲」は日本の軍国主義を鼓舞するものではなく単に故郷を偲ぶよすがにすぎない。老人にはその歌が合衆国を害する危険なものであるとは思えなかった。なぜ、密告という行為で、日本人同士が裏切りあうのか。若い男は、日本人のなかには戦時のアメリカにいることもわきまえず非常識な行動をして、しかもそれが日系人全体を傷つけているのに気づかない者がいる、と暗に老人を批判する。ふたりの議論はすれちがい、お互いに理解し合うことはできない。

第2部では急病の子をもつ親に頼まれて、老人が病院へ走り、往診を頼む。しかし、診療時間の終了を理由に医師は来ない。そこで人びとの医師への不満が爆発する。医師の報酬は1ヵ月わずか19ドルで、献身的に働く人もいれば、威張って人を見下す医師もいる。しかし、収容者側も、病気でもないのに往診を頼んだり、病院に押しかけたりする者がいる。また、医師の報酬の少なさを補うために、患者が25セントづつの謝礼を集めるといふ話もあるが、どうも納得できない。人びとは口ぐちに日ご

ろの不満を言ひあう。しかし、最後は老人の次のような言葉で結ばれている。「キャンプに収容されたことも、安い賃金で働かされることも私たちの責任じゃない。それは私たちの力ではどうにもすることの出来ないはるかに大きなものの責任です。いくら腕いて見たところで、私たちのか弱い力ではそれをどうすることも出来ないのです。…それよりも…私たちに出来ることを、私たちに許されたことを、力の限りを盡してやって行く一互ひに扶け合ひ忍びあって、明日の希望を胸に抱きしめて生きて行く。そして平和の日を静かに待っている。それが私たちの最善の道じゃないでせうか。」伊藤は、最終的にはこのような形で納得せざるをえないことは分かっているが、収容所が抱える多くの問題を、この戯曲を通じて訴えたかったのであろう。そして誰もがこれらの不満に共感し、さらにいかに生きるべきかを考える契機となればよいと考えたのであろう。伊藤は自分も含めてまわりの善良な人びとが、収容所生活によって次第に自暴自棄のひねくれた人間になってしまうのに耐えられず、これを書かずにはいられなかったのであろう。『若人』は内容が充実してきたところで終刊を余儀なくされたことは、残念であったが、この活動はツアーレイク収容所で再開されるのである。

4. Gila News Courierを中心とした活動

Gila News Courier は、WRA の監理のもと、約28名の住民スタッフが編集その他を担当して発行された収容所新聞である。WRA の検閲など発行の条件はすべての収容所でまったく同一である。ここでは、謄写版刷り、火、木、土曜日の週3回の発行で、約4,000部が住民の各家庭に配布された。発刊は1942年9月12日であった。同年10月7日から『比良時報』という日本語版も発行された。これも他の収容所と同じく、英文新聞の翻訳ではなく、一世向きの記事を掲載し独立した編集を行っていた。

Gila News Courier には、わずかに2、3編の随筆、短編小説、詩が掲載されているにすぎず、文学活動と呼べるものはない。これらの作品のテーマは、現在の境遇に耐えていけば必ず報われるという楽観論と自暴自棄の悲観論、郷愁、追憶などである。

最初の随筆は、1942年9月の“Issei Father”¹⁶である。作者は不明だが、内容から推察するとたぶん一世が自らの気持ちを綴ったものであろう。作者は6人の娘を持つ

一世の父親で、不当な強制収容を憤慨し、日系人ばかりの暮らしが娘たちに悪影響を及ぼすのではないかと案じている。不当な扱いを受けているのにどうして合衆国を愛せと教えられるだろうかと、父は思い悩む。このような悩みは、当時収容されたすべての人びとに共通していたにちがいない。娘たちの将来はどうなるのか。一世は、次の世代が自分たちを超えて成長し、自分たちにできなかったことをやり遂げてほしいと考え、それを唯一の希望として苛酷な排斥にも耐えてきた。一世はその希望が絶たれてしまうか否かの危機に立たされている。そのとき彼は17歳の娘のハナコが、収容所の高校を卒業したら Madison の美術学校へ通うために外部へ出る計画をたてており、身元を引受けてくれる人も決ったと喜ぶ姿を見る。さらに彼は長女が高校の卒業式で生徒総代となり、次のようなスピーチをしたことを思い出す。 “...in this glorious land of golden opportunities, let us remember that America is made of free, hardworking peoples from all lands. Let us work, let us pray and if we must, let us suffer to keep her as she is...America for good loyal Americans who crossed every sea to build her and create in her the perfect land...” これによって彼は誇りと、娘の将来への希望をとり戻す。悩みながらも次の世代へ希望を託すことで、苛酷な現状を切抜けて行こうとする一世の気持が伝わる作品である。実際、一世たちは自分たちの世代でアメリカンドリームが実現できるとは考えていない。自分たちが犠牲になって、次の世代でそれが実現できるのではないか。それが一世の切実な希望であった。民主主義を否定する政府の政策に翻弄されながらも、依然としてアメリカンドリームの実現を求めてやまないこの作者の態度は、当時の日系人のひとつの生きかたを象徴するものである。

1943年4月15日付の *Gila News Courier* には、特集があり、随筆“Nostalgia”および短編“The Return of Frank Everly”, さらに抒情詩が3篇掲載されている。すべて作者の名は不明である。“Nostalgia”は女性の作品ではないかと推測される。立ち退き前には肥沃な黒土の畑にレタスを栽培していたこと、近くの家へおにぎりを持って釣にいったこと、住居の前に半エーカーほどの庭があって家族用の花や野菜を植えていたことを懐かしむ内容である。人口過密でプライバシーのない収容所の日常で、過去を想い出すことはせめてもの慰め

であったにちがいない。そして心を平静に保つためには、過去を回想するのが有効な手段あったかもしれない。

“The Return of Frank Everly”は、殺人犯として裁かれている男が、法廷から飛び出して救急車に身を投げて自殺するというストーリーである。この救いのない暗い話は、作者の精神状態を表すものであると思われる。抒情詩は、4月27日にも掲載されていていずれも若者の作品であろう。次にその例をあげる。

The Desert is My Home Tokiko Inouye

The desert is my home :

I love its sun and sands,

I love its vastness, centuries' sleep ;

It challenges, comrades !

At night the cold stars crystallize,

Opalescent, free ;

I exult in their ageless eyes,

Their silence envelope me.

This desert is my home,

This the open plaines

And endless sage beneath hot suns,

The sky and sudden rains.

From golden dawn to red sunset,

The desert beckons, calls ...

I love its freedom wilderness,

Unlimited by walls.

And this will be my home ;

The desert sands I'll plod,

Far out beneath its skies and stars,

To be alone with God.⁹⁹

作者は目を楽しませるものがほとんどない砂漠の環境のなかで、何か美しいものを見出そうとしている。あくまでも澄み渡った空にきらめく水晶のような星、セイジの原に照りつける灼熱の太陽、都会では見られない鮮やかな日の出と日没などを作者の目は美しいととらえている。これらは他の収容者の詩の中にも多くうたわれており、収容所の作品に共通したものである。vastness, open plains, freedom, unlimited など束縛されない空間的

広がりを表わすことばが多く使われて、作者の自由への憧れが表現されている。しかし、作者は unlimited by walls と表現された砂漠の自然とは逆に、拘束された立場にいる。その作者が“The desert is my home”というとき、それはなんと空しくひびくことであろうか。砂漠の広がりの中に拘束された者というその対照を使って、作者は読むものの心に訴えかけている。果てのない荒野を愛するがゆえに、自らも自由になりたいと訴えているのである。新聞には WRA 当局の検閲があったため、直接的な表現は避けているものの、その婉曲表現がかえって効果的であると言えるであろう。

5. 『比良時報』を中心とした活動

日本語新聞『比良時報』は、Gila News Courier よりも活発に文芸活動を行なった。1942年11月、比良文芸協会が発足し、山の市に本部、川の市に支部がおかれた。そして『比良時報』と連携して活動を行なう計画であった。内容は大塚杏村が短歌を、桜井銀鳥が俳句を、梁瀬紫葉子が川柳を指導し、小説および随筆は『羅府新報』で執筆していた江上初枝が担当するというものであった。これらの指導者は、戦争前に日系社会ですでに創作活動を行っていた人びとである。桜井銀鳥主宰の比良吟社では、会員が毎月1回の句会に決められたテーマで詠んだ自作の5句をもって集まり、互いに批評し合った。川の市では、1942年12月に「比良とつくに歌友会」が武田露二の指導で発足、山の市では大塚杏村の「すわろ短歌会」が誕生した。武田露二は、「果てなき曠野、緑さへない砂漠の生活にも其処に文芸其他によって…魂を昂揚されるなれば私共の日常はもっと潤ひをもつことができやう」⁹⁸と述べている。いずれの収容所でも同様に、人びとは無味乾燥な生活を少しでも変えて行こうと努力したのである。

短詩形文学は、誰でもすぐに馴染むことができ、創作が容易であったため、戦前すでに創作をしていた人だけでなく、収容所にはじめてはじめて文学活動に参加したまったくの初心者も多かった。彼らは与えられたテーマで熱心に創作し、月に1度の集まりに提出する。そこでほめられて作品が新聞にでも載ることになれば、大いに喜んでなお一層創作に励む。創作に熱中しているときには、収容所に拘留されていることも忘れて穏やかな気持ちになれるであろう。

山元麻子⁹⁹は、比良文芸協会に誘われて参加した経験

を次のように書いている。

夜は庵原夫人のお伴をして句会に行った。櫻井先生の高弟、山中氏の俳句についての講話であった。…主観的句の説明があった後、席題「霞」が出された。十五分間以内で出来るだけ作れと言われた。私は六句書いたが、數に於いては多い方だったらしい。一枚に一句づつ書き一同無名で提出、批評されたが、ぼやっとしている。これはもっと適確な言葉を遣うべきだ。色々並べた感がある—などと批評されたが、中で

畝遠く芽生えし苗や朝霞

はまあ上乘の部といわれた。この方は、私を他のお弟子の方たちへ「才気ある句を作るひとだ」と評されたと言ったが、俳句の本質である酒脱な飄逸な閑寂なといった句は、墓場に入るまで作れないのだろうかと思ったら、我ながらうとましくなった⁹⁹。

山元は、ロサンジェルス日本語新聞『加州毎日』に随筆や童話を連載しており、すでに作家としての地位を確立していたから、はじめは素人の会には参加したくないというプライドもあったようで、たびたびの勧誘にも積極的な返事をしなかった。しかし彼女は仕方なく句会に参加するうちに、次第に句を詠む楽しみを知ることになった。山元は『比良時報』の記者になってほしい、寄稿してほしいなどと依頼されるが、すべて断って農園の労働に専念する。彼女はその理由を「不遜といわれようが、剛情と罵られようが、厭だから厭なのだ。人気があれば、そこには人の嫉視があり遂には危険にもさらされることになる。私の今の境涯としては何よりも安全第一でなくてはならない。その點百姓は何よりも目立たず安全地帯に違いないのだ。」¹⁰⁰と述べている。開教使の妻で教師でもあった彼女は、戦前の日系人社会の指導的立場にいた。夫は危険人物として、開戦の翌日 FBI に逮捕されて抑留所送りとなった。このような彼女の経歴は収容所では、尊敬されると同時に人びとの嫉妬の的もなった。なるべく目立たずに生きるために、文筆活動をやめて農園で働くという彼女の選択は、薄い壁に仕切られた住居にさまざまな背景をもつ日系人がともに暮らす難しさを示している。そこは誹謗中傷や流言蜚語の飛び交う異常な世界であった。山元のような人はこれまでの仕事を離れ、経験したことのない農業労働に従事することによって、文学などに縁遠かった人は創作に熱中することによって、精神状態をきわめて正常に保つことができたのであろう¹⁰⁰。

『比良時報』では文芸協会の発足とともに、文芸誌の発行を企画していた。原稿を募集すると、たくさんの反応があったが、女性の作品が少なかったため、女性の応募を勧める記事が載っている。このような事実からも、山元麻子がかつての教え子や読者から書くようにと再三勧められた事情が推察できる。雑誌を発行するには多くの困難があった。原稿はともかく、まず紙をどのように確保するか。次に印刷機の問題を解決しなければならない。紙は所内の売店を通じて、外部へ注文したが、戦争中のことで充分な量を入手するのに時間がかかった。新聞は手動の謄写版印刷機2台を使って印刷されていた。手動では多くの時間を要するため、昼間は新聞の印刷で手いっぱい、他のものを刷る余裕はない。したがって、その間をぬって何百部もの雑誌を作ることは至難のわざであった。当時、担当者は自動謄写機があればどんなによいかと、話し合ったという。12月発行の予定がかなり延期されたが、ついに『比良時報』文芸特集号『霸王樹』が1月16日完成、1部15セントで発売された。印刷よりもむしろ紙の不足により発売が遅れたと新聞には書かれている。とくに表紙の紙がなく、ありあわせを使わねばならなかった。『霸王樹』とは、収容所周辺に多く自生するジャイアントカクタスというサボテンを意味する。雑誌は48ページの堂々たるものであると紹介されているが、著者は長年の調査にもかかわらず、まだこの本を入手することはできないでいる。短詩形文学の作品が多かったのではないかと推察されるが、明らかではない。

『比良時報』の文芸活動はこの雑誌の発行をもって終わる。これ以後に注目すべき活動はない。『霸王樹』が発行された年の秋には、不忠誠の人びとがトゥーリレイクに送られ、文芸活動にたずさわっていた一世、帰米二世の多くが移動してしまったことも、文芸不振のおもな原因であろう。

『比良時報』に掲載された唯一の短編小説は、1944年新年号の懸賞小説の1等入選作として選ばれた「愚かなる父親」である。懸賞といっても、1等の賞金が10ドルというつましいものであった。作者の筋節与十郎は50代の一世代で、自身の経験を書いたと推測される。主人公の「父親」は、妻を亡くして、長男、長女を連れて収容所生活を送っている。その周囲には、子供を外部へ送り出し、その身を案じながら暮す老人ばかりが増えてゆく。主人公も毎晩、たった1冊だけもってきた大学の教科書を父に隠れて読んでいる長男の姿を見て、ついに決心し

て出所を許す。息子は妹に父の面倒を見るようにと言い残して去って行く。妹は1日も早く出たいのだが、兄にそむくわけにもいかず、仕方なく収容所に残って父の面倒をみている。父はそんな娘を不憫に思うが、子が去ったあとの自分を考えると、手放す気になれない。一方では、自分と同様に娘を外部へ出したある未亡人へ深い恋心も感じている。そうした生活のなかで、ひとりの一世老人が失踪する。彼は収容所を出た末の息子を案じていたが、息子を思う気持ちはつのるばかりで、ある日散歩に出たまま戻らなかった。彼は高齢で判断力も鈍っていたが、主人公には息子の後を追って行った老人の気持ちがよく理解できた。人びとは捜索隊を組織して、砂漠へ老人を探しに出かけ、主人公もついて行くが、老人はどこへ消えたのか果てしない砂漠にその姿はない。主人公は息子の身を心配しているが、娘を連れて外部へ再定住する勇気もない自分を愚かな父親であると感じて苦しむ。美しい未亡人への想いも含め、すべての煩惱を断ち切るために、主人公は仏への信仰に心の安らぎを見出す。仏に救いを求めるあたりは、かなり安易な結末であるが、収容所の現実を赤裸々に描いている点は評価できる。当時は家族のなかでも英語に自信のある若い人びとが次々と収容所を去って行き、家族は崩壊して老人ばかりが取り残された。収容所閉鎖の噂も流れるなかで、残った者は焦燥感をつのらせていた。老人の失踪⁽²⁾は、先に述べた『若人』第3号の「砂漠に咲く花」のなかでも取り上げられており、人びとの心を痛めたできごとであったことがうかがえる。日本語新聞の短編小説は、この1編にとどまる。

1945年の元旦にはもはや文芸特集もなく、短歌4首のみの淋しさである。そして最後に掲載された文芸は、終戦も間近に迫った7月18日の「転住」と題する詩であった。作者は半世紀を過ぎたカリフォルニアの農園をあとに全てを失って収容所へ送られてきたが、再定住するときになって、カリフォルニア州の排日の現実を知り、人種差別がないと言われる東部へ出発して行く。西部へ帰りたくても帰れず、後ろ髪を引かれる想いで東部へ旅立つ気持をうたっている。若者にとって東部は、希望の持てる場所であったが、家から出たことのない老人たちにとって、東部は未知の世界であり、不安な旅立ちであったにちがいない。この詩はヒラで日本語文芸を支えてきた人びとの気持を代表するものであったかもしれない。Gila News Courierには日本の降伏を報じる記事が大

きく掲載されているが、『比良時報』には敗戦について1行も書かれていない。この事実は、忠誠組として収容所に残った一世および婦米二世も祖国日本の敗戦を認めたくなかったという心情の表れであろう。

6. 川柳誌『志がらみ』

青砥疎影、清水其蛸を中心とした比良川柳志がらみ会は、月刊誌『志がらみ』を発行していた。会員はヒラ収容所にかぎらず、他の収容所や抑留所、デンヴァー、クリーヴランドなど軍事地域外に自由に住んでいた日系人まで、幅広い人びとであった。1ヵ月の維持費として25セントを支払った人は誰でも会員になることができた。そして毎月、雑詠10句および題詠5句、添削用の句を1句、合わせて16句を会宛てに送ることになっていた。さらに随筆、小説、漫談なども投稿することができた。これらの作品のなかで選考会議を通ったものが『志がらみ』に掲載された。筆者が入手できたのは、1944年秋に発行された『志がらみ』第2巻第5号のみであるため、全貌は不明であるが、かなり頻繁に発行されていること、『比良時報』に月例会を知らせる記事がないこと、比良文芸協会の川柳担当者の作品が掲載されていないこと、会員が全米に散在していることなどを総合すると、これは通信教育の形式をとった川柳添削講座ではないかと考えられる。そしてただ1冊の『志がらみ』から判断すると、創刊されたのは1943年中で、44年の年頭から秋までに5号を発行していることから、他の雑誌と同様に紙不足などのために、毎月の発行はできなかったと推察される。謄写版刷り約40ページ、植物画などをあしらった洒落たレイアウトで、非常に達筆な字で書かれている。発行部数は150部であったが、希望者が多かったためこの号は200部印刷したと編集後記に記されている。

主宰者のひとり清水其蛸は、巻頭言「明日に生きる」⁽²²⁾のなかで、川柳は有閑階級の人びとのものではなく、大衆の詩であると強調している。それゆえ過去の古くさい感覚にとらわれず、現在の状況をきちんと認識して、そこから作品を生み出さねばならないとしている。本来、川柳は決められた題にしたがって作るものではない。川柳の本道は雑詠にある。『志がらみ』の雑詠からは、収容所のさまざまな場面と、その時どきの人びとの哀歎が浮びあがってくる。

清水其蛸選「流転川柳雑詠」⁽²³⁾のなかからいくつかを引用して解説する。

煙突の煙の下に瘦せた町

三原吾以知

(ハートマウンテン)

ハートマウンテン収容所は寒さの厳しい高原にあったため、各バラックの暖房の煙突が目立っていた。黒い煙を吐く煙突の下に黒いタールペーパーで覆われたバラックが並んでいるさまは、豊かな町という印象ではない。

「瘦せた町」という表現がぴったりである。

娑婆気分やはり柵あり見張搭

塩出大州(マンザナ)

マンザナ収容所は、カリフォルニア州にあり、シエラネヴァダ山脈を望む比較的美しい場所にあった。収容所にいることを忘れて暮らしていてもふと気がつくと、監視搭があつて、銃をもった兵士が見張りの任務についている、やはり自分は囚われの身なのだ気づく一瞬である。

故国の声聞きたいばかり午前五時 山内狂月(マンザナ)

作者はたぶんひそかに日本の短波放送を聞いているのだろう。もちろん禁止されていた行為ではあるが、一世は日本の大本営発表を聞いて一喜一憂したという。時差をものともせず、暗いうちから起き出して、隠れてラジオに聞き入る一世の姿である。

平和まで生きる努力にくたびれる 仁熊鳥城(マンザナ)

作者はシアトル在住の一世で、夫妻とも歌人であった。収容所にはいった時は60歳くらいであろう。平和になるまでと思って頑張っているが、収容所生活が長びくにつれて張り詰めた気持も消えて、次第に疲れてきたというのが本心ではないか。

どうにかなるだらう未来へ昼寝する 練尾静歩(ヒラ)

前にあげた作品とは対照的に、のんきに寝て暮らし、戦争が終わればどうにかなるだろうと楽観的になっている一方で、あがいてもどうにもならない自らの境遇を自嘲している。

何時船が来るか三度の秋が来る

勝木水郷

(トゥーリレイク)

不忠誠組のなかには、日本勝利のあかつきには日本軍が船で迎えにきてくれるというデマが流布していた。船を待っているのに、3年目の秋を迎えても船は来ない。来ない船を待つ自分を淋しく笑ったうたである。

今日もまた外住らしい荷が動き 渡辺雅楽 (グラナダ)

さっさと外部へ再定住のために出て行く人、それを見送る人は取り残される淋しさを味わったことであろう。今日は誰がどこへ行くのかと、皆が興味をもってその動きを見つめているのである。

A1へ沈む気論す辛い母 藤井孫六 (ポストン)

A1は徴兵カードの記号で、合衆国軍の兵士となる資格があることを示す。息子が徴兵されると知って、母親の気持は沈んでいく。それではいけないと思い、気をとりなおそうとするが、やはり辛い気持ちには変わらない。

一人子に征かれて一人己が齡 新屋軟葉 (ポストン)

一人息子が出征して、ひとりぼっちになってしまった一世が、思わず自分が年老いたことに気づく。淋しさの迫るうたである。

ジャップイズジャップ⁽⁹⁴⁾で貰ふ紫心章 墨田真鶴 (ポストン)

ジャップはあくまでもジャップで、忠誠なアメリカ人になれないのだという世論が圧倒的になって、日系人の強制収容が実施された。しかしそのジャップが、合衆国軍兵士として紫心章を授与されるほどの勇敢な戦いぶりを見せたのである。皮肉な結果であった。

スコーピンだからお前は殺される 砂田踏舟 (ヒラ)

美しい蝶であれば人びとから愛されるが、さそりであるゆえに忌み嫌われて殺される。日本人であるがゆえに排斥され、収容所へ入れられた作者は、さそりに自分の運命を重ね合わせて同情を寄せる。悲しいうたである。

慎んで居てもジャップの声を聞き 富田虎山 (オックスフォード)

再定住した人のうたである。適性外国人だからと目だたないように暮していても、あいつはジャップだという陰口が聞こえてくる。収容所を出ても日系人に心の安らぐ暇はない。

創作した人びとは『若人』とはちがって、ほとんどが移民としての辛酸をなめた年配の一世男子であることが、その表現からうかがわれる。川柳は文学的価値の低いものとされ、これまで収容所の記録のひとつとして注目されることはなかった。川柳は短い句のなかに状況を的確にとらえており、一世の心の軌跡を示すものである点から、見落すわけにはいかない。

おわりに

ヒラリヴァー収容所は、監理当局との摩擦や住民同士の反目もない平穏な収容所であった。英語による創作活動には見るべきものがなかったが、日本語による文学活動が盛んであった。日本語版の新聞『比良時報』を中心に比良文芸協会が発足し、新聞の特集号として別冊の文芸誌『霸王樹』が発行された。川柳誌『志がらみ』は、すべての地域の一世を対象とした通信講座で、川柳を楽しむ人を増やした。その作品は、一世の心の機微を表現した点で、貴重な記録である。

堀米二世の組織である比良男女青年会は、展覧会の開催や日本語書籍の図書館の運営などの社会的活動の他に、機関誌『若人』を発行した。会の基本方針は、収容所を修養所に変えて自らを磨き、平和が訪れた時に備えることであった。『若人』には、収容所で若者が直面したさまざまな悩み、苦しみが綴られている。文学というよりもむしろ問題提起であった。この機関誌には、短歌や俳句がないことが特徴である。しかし、会員は堀米二世で、大多数が不忠誠となったため、WRAから反米・親日集団ではないかとの疑いの目で見られ、幹部の逮捕、機関誌の発行禁止などの処分を受けた。これは、マンザナやポストンの暴動事件に恐れをなした当局が、ヒラで事件が起きるのを未然に防ごうと、極度に神経を尖らせた結果の措置であった。しかし、会員は秩序を守って行動し、決して過激な暴力行為などに走ることはなかった。『若人』は第3号で終わるが、活動に携わった人びとはトゥーリレイク隔離収容所で活動を再開する。ある者は

鶴嶺湖男女青年団に参加して『怒濤』を発行し、ある者は文芸誌『鉄柵』同人となった。『若人』に力作を載せた伊藤正は『鉄柵』創刊号にも早速、随筆を書いている。トゥーリレイクで活動した人びとは、戦後ロサンゼルスで南加文芸会に集り、『南加文芸』を発行した。そしてこのなかから優れた婦米二世作家が誕生し、日本でもその作品が刊行された。『若人』に芽ぶいた婦米二世文学は、『怒濤』、『鉄柵』で育てられ、戦後の『南加文芸』で花ひらいた。婦米二世文学の萌芽は、ヒラリヴァー収容所で生れたということができる。

謝辞

『若人』、比良男女青年会名簿などをご提供くださった、南加文芸同人・加屋良晴様、藤田晃様に感謝いたします。

註

- 1) 篠田左多江, 「日系アメリカ文学: 強制収容所内の文学活動(1)ポストン収容所」, 『東京家政大学紀要』27 (東京家政大学, 1987年), pp.33-41.
- 2) 篠田左多江, 「日系アメリカ文学: 強制収容所内の文学活動(2)トゥーリレイク収容所」, 『東京家政大学紀要』29 (東京家政大学, 1989年), pp-11-21.
- 3) 篠田左多江, 「日系アメリカ文学: 強制収容所内の文学活動(3)ハートマウンテン収容所」, 『東京家政大学紀要』33 (東京家政大学, 1993年), pp.69-80.
- 4) 『比良時報』1942年12月5日付.
- 5) cotton wood, 北米産ポプラの一種.
- 6) mesquite, マメ科の低木. これらの植物は, 1インチ成長するのに1年を要し, 大木になるには数百年かかる貴重なものであるという理由で, のちに採取が禁止された.
- 7) 1942年12月6日, 全米日系市民協会のメンバーが, 親日派に襲われた事件をきっかけとして, 日ごろのさまざまな不満が爆発, 収容者の暴動に発展した. ヒラでは同じ12月4日から8日まで手工芸展開催.
- 8) 13名という記録もある. 一同はモアブを経てループ抑留所 (Leupp, Ariz.) へ送られた.
- 9) ベネット所長 (Leroy H.Bennett) の判断で, 会の内規を見直しただけで, 解散は免れた.
- 10) 戦前はロサンゼルス在住の婦米二世. 静岡県で中学までの教育を受けた.
- 11) 佐藤一齊 [1772-1859] 江戸末期の儒者. 1841年以

- 降幕府の儒官として, 朱子学の立場をとったが, 陽明学の影響を強く受けた. 『言志四録』を著す.
- 12) 戦前はカルフォルニア州ガダグループ在住の婦米二世. 両親は広島県出身.
 - 13) 比良男女青年会, 『若人』第2号 (ヒラリヴァー収容所, 1943年, 6月) p.6.
 - 14) *Gila News Courier*, Sept. 12, '42.
 - 15) *ibid.*, April 27, '43.
 - 16) 『比良時報』1942年12月5日付.
 - 17) 本名青木ヒサ. 1903年山形市生れ. 山形高女を経て東京女子師範本科第2部, 日大高等師範部国漢学科卒業. 東京で教師となり, 開教使の夫ともにホノルルへ渡る. 日本語学校の教師となり, のちにオークランド, ロサンゼルスでも教える. 加州毎日新聞者客員. サンタニータおよびヒラ収容所を経て, 第2次日米交換船帝亜丸で日本へ帰国.
 - 18) 山元麻子, 『茨ある白道』(私家版, 1952年) pp.249-250.
 - 19) 前掲書, pp.221-222.
 - 20) 山元は, 『若人』第2号に「土に学ぶ」という随筆を青木ヒサの名で書いている. pp.7-9.
 - 21) この老人は, 1年以上のちに収容所をはるかに遠く離れた所で, 遺体となって地元の人に発見された.
 - 22) 比良川柳志がらみ会, 『志がらみ』第2巻第5号, (ヒラリヴァー収容所, 1944年) pp.1-2.
 - 23) 前掲書, pp.13-20.
 - 24) 西部防衛司令部長官ドゥイット將軍 (John L. Dewitt) のことば.

参考文献

- Official publication of Gila River Relocation Center: *Gila News Courier*, Sept. 12, '42-Sept. 5, '45.
- 『比良時報』1942年10月7日-45年9月5日
A Year at Gila, July, 1943.
Anniversary Supplement, Sept., 1943.
- 比良男女青年会, 『若人』創刊号 (1943年4月), 第2号 (同年6月), 第3号 (同年8月)
- 比良男女青年会『会員名簿』, 1943年8月
- 比良川柳志がらみ会, 『志がらみ』第2巻第5号, 1944年
- 山元麻子, 『茨ある白道』, 私家版, 1952年
- Drinnon, Richard: *Keeper of Concentration*

Camps, Berkeley, L.A & London, Univ. of Ca. Press, 1987.

Gesensway, Deborah & Roseman, Mindy: *Beyond Words*, Ithaca & London, Cornell Univ. Press, 1987.

Summary

During World War II, Executive Order 9066 forced the Japanese Americans out of military sensitive areas along the Pacific coast. They were evacuated from all the designated areas and transported to the assembly centers. A few months later they had to move to permanent relocation centers.

One of them was the Gila River Relocation Center located in Arizona desert, totally barren environment. War Relocation Authority encouraged residents to organize various club activities to soften their hearts which had a tendency to harden under the circumstances.

WRA published community newspaper, *The Gila News Courier* in both English and Japanese. People contributed poems and essays to the paper. Two remarkable literary magazines published in the Gila Center were *The Youth* and *Shigarami*. The former was a bulletin published by the Gila Young People's Association, which was the kibeï (nisei educated in Japan) organization. The latter was *Senryu* (a short satirical poem) magazine by the Gila *Senryu Shigarami* Group. The members of the Gila Young People's Association made efforts to develop their culture while they stayed in the center, but they were branded as a dangerous pro-Japan group. Though WRA officials prohibited them to publish their bulletin, the members persuaded them and continued their activities. They overcame such a difficulty many times.

Most of the Association members were classified as disloyal to the U.S. and transported to the Tule Lake Segregation Center in the fall, 1943. They organized again the same sort of associations there and made remarkable contribution to create kibeï literature.